

「一流になりなさい。それには、一流だと思ひ込むことだ」という本からです
どこにでもあるものは、程度の悪いものだと思っている。

自分にしかできないことは何か？企業でも、一人間でも、その発想をもつことが自らの価値を高めてくれます。

女性の憧れの地、由布院。玉の湯は、その由布院を創りあげてきた一人、溝口薫平さんが手塩にかけて育てた名旅館です。

船井幸雄先生が大好きな玉の湯は、私にとっても年に数回は訪ねるとも大切な場所でもあります。「木立のなかに佇んで、風景にすっかり馴染んでいる。いまは、主張しすぎたり威圧感を感じさせるものはダメだね」玉の湯のよさを船井先生に聞いたとき、すぐにそう答えてくれました。確かにいまは、周囲の自然に馴染む、同化する、自然環境と共生している場に若い女性は共感をもちます。

一方、主張しすぎたり、自然環境との調和を乱したり、精神の佇いのよさを感じさせない場所には足が向きません。心によい、心地よい場を、直感的に自覚し、その場所へと引きつけられるようです。「とくに若い女性は、その直感に優れているよ。世の中が偽物ばかりになって、直感が磨かれてきたのだろうね」船井先生は私などより、ずっと若い女性の動向に詳しく、これは勉強しないといかんと思わされるが多々ありました。

さて、その玉の湯の溝口薫平さんに、いつもたくさんのお言葉をいただいているのですが、ブランドについてお伺いしたとき、とても強い感銘を受けました。「そこでしか体験できない価値、それがブランドではないでしょうか？そして、その価値の旗を天下にあげて、妥協することなく磨くことで、ブランドは高まるのだと思います」

そのとおりだと、思いました。そこでしか体験できない価値を掲げ、創りあげ、磨き続ける。そこにブランドが生まれ、高まっていくのです。

船井先生は、こう言います。「いまはね、どこにでもあるものは、程度の悪いものだと、消費者が思っているのだよ。独自の長所をもった企業、人間、地域を探している時代だね」私にしかできないこと、我々にしか提供できない体験。我が社だけが貢献できる長所。それを、「独自貢献点」と呼ぶことにしました。「他の人にできることは、他の人に任せたらいい。誰もできない例外を、しっかり処理するのが上司だよ。例外処理の原則と言うんだ」

企業の経営も、よりよく生きることも、一体系のなかにあるのだと、年をおって理解するようになります。独自貢献点を、自分の長所のなかから探し、それを誰もが真似できないレベルまで高めていく。それが、確かにブランドになります。しかし、一度認められた独自貢献点も、磨き続けなければ、劣化してしまいます。一度掲げて認められた価値を、妥協することなく磨いているか？強い意志で、妥協すまいぞ！と進みつづける道程に、ブランドは育まれていくのでしょうか。「守る、ということが大切ですね。守るということは、高めるとのことですからね。その意志を、継承していつてくれる文化を創らないと、いつの間にか、どこかで見た街に由布院だってなってしまう」

溝口薫平さんは、そんなことを淡々と語ってくれます。確かに、精神の佇いを感じさせる人間、決して主張しすぎず誰をも包みこんでしまう人間、受容性の高い人間に、人は魅かれるのだなどと、薫平さんと話をしていると実感します。それは、粹ということなのかもしれません。

溝口薫平さんにブランドについて伺ったとき溝口さんは何と言っていますか？

()